

# リハビリテーション科学部

学校推薦型選抜(一般)  
小論文

**問題** 次の文章を読み、以下の設問（問1，問2）に答えなさい。

二十五歳で小説なるものを書き始めてから今年で六十七年になります。私の最後の長編小説「晩鐘」を書き上げたのは八十八歳の春でその時はもう頭も身体もスッカランになっていて、もうこれで何もかもおしまいという気持でした。今まで何十年も頑張ってきたのだから、この後はのんびりと老後<sup>すご</sup>を過せばいいと友人からもいわれ、自分もそう思っていました。

ところがです。<sup>いよいよ</sup>愈々「のんびり」の生活に入ってみると、これがどうも、なんだか気が抜けて楽しくないのです。仕事をしていた時は朝、眼が醒<sup>さ</sup>めるとすぐにその日にするべき仕事、会うべき人のことなどが頭に浮かび、

「さあ、やるぞ！ 進軍！」

といった気分でパッと飛び起きたものでした。しかし「のんびり」の毎日では、起きても別にすることもなし……という感じで、いつまでもベッドでモソモソしている。つまり気力が籠<sup>こも</sup>らないのです。

仕事をやめれば訪ねて来る人も急に絶えます。大体が人づき合いのいい方ではないので、自分の方から人を訪ねようという気もなく、それよりも気の合った人はみな、「お先に」ともいわずにさっさとあの世に行ってしまうと、ちらほら残っている人はやれ脚が折れたとか、癌らしいとか、認知症の気配がある、などというありさま、誰とも会わず、電話もかからず口も利かずという日が珍らしくなくなりました。

娘一家が二階にいるけれど、向うには向うの生活もあり、階下のばあさんがどうしているか、生きてるか死んでるか、浴槽に死体になって浮かんでやしないかなどと心配するような孝行娘ではないので、用事がない限りは降りて来ない。といて、こっちから二階までエッチラオッチラ安普請のむやみに段差の高い階段を上っておしゃべりをしに行くほどの話題といて別になし、お互いに見飽きた顔ではあるし、それにあまりに長い年月、私は仕事一筋に明け暮れていたため、生活のリズムが普通ではなくなっていて、従ってソッチはソッチ、コッチはコッチ、という暮し方が定着してしまっただけです。

週に二日、家事手伝いの人<sup>すわ</sup>が来てくれるほかは、①私は一人でムツと坐っている。べつに機嫌が悪いというわけではないのだが、わけもなく一人でニコニコしているというのもヘンなもので、自然とムツとした顔になるのです。本を讀めば涙が出てメガネが曇る。テレビをつければよく聞えない。庭を眺めると雑草が伸びていて、草取りをしなればと思っても、それをすると腰が痛くなってマッサージの名手に来てもらわなければならないので、ただ眺めては仕方なくムツとしているのです。

そうしてだんだん、気が減入<sup>めんど</sup>ってきて、ご飯を食べるのも面倒くさくなり、たまに娘や孫が顔を出してもしゃべる気がなくなり、ウツウツとして「老人性ウツ病」というのはこれだな、と思いつつながら、ムツと坐っているのです。

「女性セブン」のKさんが訪ねて来たのはそんな時でした。用件はエッセイ連載の依頼です。

連載？ 週刊誌の連載といえば締切は毎週ではないか。

それは今の私には無理だと思いました。

「もう私も九十歳すぎましたからね。これからはのんびりしようと思ってるんですよ」

一応、そういいましたが、その「のんびり」のおかげで、うつ病になりかけているんじゃないか、という思いが頭の隅っこにパッパパと明滅したのです。

そんなこんなで隔週ならば、という条件で書くことになったのですが、タイトルの「九十歳。何がめでたい」はその時、閃めいたものです。ヤケクソが籠っています。

【出典】 佐藤愛子『九十歳。何がめでたい』 2016年 小学館

問1 下線①私は一人でムツと坐<sup>すわ</sup>っている。という状況について、筆者はどのような心情にあると考えますか。300字以内で説明しなさい。

問2 この筆者に対して、リハビリテーション医療を志す者としてどのような働きかけをしようと考えますか。あなたの考えを具体例をあげて700字以内で説明しなさい。